

「重力波発見」と建学の精神

小岩利夫

創立者の命日のある2月にその遺徳をしのぶ会として「景仰会」

を毎年開催しています。昨年は前校長の谷川平夫先生が、会の意味を伝えた後、読売新聞社の海外駐在記者だったころの経験を話してくださいました。今年は、自分が校祖杉浦重剛先生の生い立ちを、時代背景を交えて話しました。

膳所藩や明治政府の派遣留学生としてイギリスに留学し、東大予備門の校長を経て本校を創立した話。後半には、本校の建学の精神として生徒に伝えている先生の言葉を取り上げて、日常生活の中でも心にとめてほしいと話しました。「まさかのときに役に立つ人間になれ」は、その言葉の一つです。

三・一一のときに石巻市水浜集落で、犠牲者が非常に少なかったのは、非常時の備えを普段から怠らなかったためだそうです。このことから毎日学んでいることをきちんと積み重ねていくことの大切

さを知ることができません。必要なときに力を出せる人物になるためにも努力を重ねることの重要性を話しました。

最近のニュースに、重力波の発見が大きく報道されました。100年も前に物理学者アインシュタインが一般相対性理論でその存在を予言し、世界の科学者がその後も研究を続け、今回、ブラックホールの衝突で生じた重力波の測定に成功したのです。

私立学校の建学の精神は、時代を超えて受け継がれ、それぞれの学校を支えています。長い歴史を通して、校祖の言葉を大切にすることとは、重力波の存在を信じて研究を遂行してきた科学者の探究心に通じています。重力波による0.00000001mという、小さな現象の測定に100年かかり、また新たな発見に繋がるのです。本校でも建学の精神は、時代を越えて受継がれ、未来を切り開く生徒の支えとなり、生き続けるものなのです。